

使徒の働き18章1-17節 「腰を据えた宣教」

1A 同労者の出会い 1-4

2A 神を敬う人々 5-8

3A 「語り続けろ」との励まし 9-11

4A 裁判からの救い 12-17

本文

使徒の働き 18 章を開いてください。ここから宣教に大きな変化が起こります。それは、パウロが反対や迫害があったものの、長期に渡って腰を据えて留まることができたことです。コリントの町で、一年半以上留まることができました。次にエペソに向かうこととなりますが、それは次回以降で学びますが、そこでの宣教は二年以上に及びます。パウロが長期にいた、これらの場所で、パウロ、シラス、テモテ以外に、出会いによって与えられた同労者たちも出てきます。そのような相互の働きによって、二つの町に教会が建て上げられていくようになります。

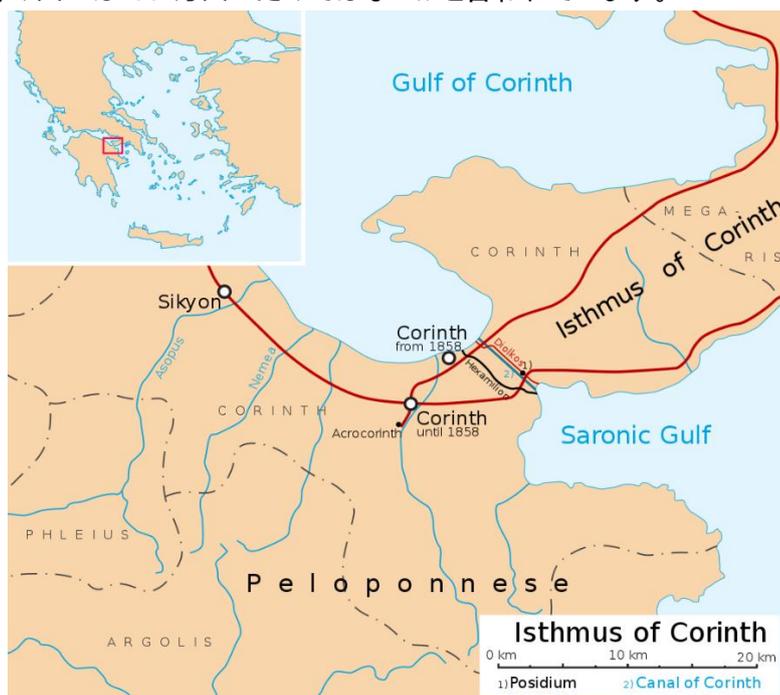
1A 同労者の出会い 1-4

¹その後、パウロはアテネを去ってコリントに行った。

パウロはアテネにいましたが、次にコリントに来ました。アテネから約 80 キロメートル西にある町です。アテネは哲学者らがいたところですが、コリントはまるで性格が違います。やりたい放題、道徳的に乱れていた町です。非常に大きな町で、当時の人口は 60 万人いたのではないかとされています。

コリントの町の特徴は、それが、地峡と呼ばれるところにあることです。ギリシアは、南はペロポネソスという半島になっています。半島といっても、ほとんど島のようになっていて、というのは、非常に細長い陸地でわずかにつながっていたからです。東がエーゲ海、西がイオニア海に挟まれていて、その幅はわずか 6 キロメートルです。(イオニア海は、ギリシア南部とイタリア半島の間にある海です。その北が、アドリア海と呼ばれます。)

そこで東から西、西から東の貿易が、



西にローマがあるので盛んにおこなわれていましたが、ペロポネソス半島を大きく迂回せずに、この地峡で陸揚げして運搬することによって、400 キロも短縮できるので、行いました。運河の計画は、ローマ時代もありましたが断念。今は、19 世紀の終わりにできあがった運河があり、コリントス運河と呼ばれます。しかし、当時は陸揚げして移動させました。それが今も遺跡で残っています、デオルコスと呼びます。

私たちは 2018 年のギリシアの旅で、アテネからコリントの旅もしましたが、次第に、地峡に近づきます。つまり、東にはエーゲ海、西にはイオニア海に挟まれていて、両側に海が見えてくるようになります。そしてついに、コリントス運河と呼ばれる運河を見ました。たいそう深い運河で、80 メートル近くあります。両側が切り崩され崖になっていました。その下を、わずか 25 メートルのプールのほどの幅しかないので、ぎりぎりのところを船が、小さな船に引っ張られて牽引されていくのを見ました。けれどもこれができるのは 19 世紀です。

当時はつながっておらず、地峡になっていて陸揚げしていたのです。そこで、ローマ時代にその貿易で大いに栄えて、アカイア州の首都になりました。イオニア海のコリント湾にはレカイオンという港、そして、エーゲ海のサロニコス湾には、使徒の働きやロマ書にも出て来る、ケンクレアという港があります。その間を、船から積み下ろされた荷物が、もう一方の湾に移動していきました。小舟を台座に載せて動かしていったようです。

それからもう少し走ると、コリントスというのどかな町が見えます。その中に、かつてのコリントの中央のところにあった遺跡があります。そして山がそびえていますが、アクロコリントと呼ばれるアクロポリスです。その山頂に、アフロディーテ神殿の遺跡があるそうです。

コリントは、水夫たちが思う存分遊ぶところなり、その相手をする女たちがいた、ということにあります。それが、偶像礼拝と密接につながっていました。アクロコリントスというアクロポリスがあって、その山頂に、女神アフロディーテの神殿がありました。アフロディーテは、愛、美、性の神で、カナンのアシュタロテにあたります。女祭司たちが千人もいましたが、売春婦です。売春して儲けを神殿の運営にあてがっていました。「コリント化する」という言葉が当時使われていて、「道徳的に退廃する」という意味を表していました。ギリシャ劇で、コリント人が出て来ると、泥酔する人間として演じられていました。そういう中で、宣教の働きをするということです。

コリント人への手紙第一を読めば、教会として建て上げられたけれども、数々の肉の行いに関わる問題が噴出していることが分かります。分裂の問題、淫乱の問題、偶像礼拝の問題、聖餐式や愛餐会で我先に食べ物を食べてしまう問題、それから復活はなかったという教えが入り込んでいました。しかし、パウロがどれほど彼らを父親のようにして愛し、彼らがいろいろな問題があったからこそ、ますます時間をかけて、愛と情熱を惜しまずに与え続けたことが分かります。

聖霊の働きを見れば、こうした証しが数多くあります。注解書には、「コリントのジーザス・ムーブメント」と呼んでいました！南カリフォルニアのジーザス・ムーブメントを意識してのことです。麻薬やフリーセックスに浸っていた、若者たちが主に立ち返り、イエス第一になって、共同体を形成したりして、一大霊的覚醒が起こったのです。

² そこで、ポント生まれでアキラという名のユダヤ人と、彼の妻プリスキラに出会った。クラウディウス帝が、すべてのユダヤ人をローマから退去させるように命じたので、最近イタリアから来ていたのである。パウロは二人のところに行き、³ 自分も同業者であったので、その家に住んで一緒に仕事をした。彼らの職業は天幕作りであった。

パウロが、アテネから独りでありました。テモテとシラスは、基本、ベレアにとどまっていた。その時の彼の状態が、「弱く、恐れおののいて」いました（Iコリント 2:3）。マケドニアでの宣教は危険続きで、アカイアに来ていても、心身がトラウマ状態になっていたのです。

しかし神は、貴い同労者を彼に与えてくださいました。アキラとプリスキラという夫婦です。ポントスとは、トルコの北のビティニアにあったところで、そこからのユダヤ人です。パウロの手紙では、プリスカとなっています。プリスカが正式な名前前で、プリスキラが親しみを込めた呼び名です。この二人は、ローマにいた人たちですが、ここにあるように、クラウディウス帝が、全てユダヤ人をローマから退去するように勅令を出したとありますが、それが紀元 50 年頃と言われています。ですから、使徒の働きは、この時点でイエスがよみがえられてから約 20 年経っているということです。

ところで、ローマ人の反ユダヤ感情については、ピリピにおいて、パウロたちを捕らえた者が、「彼らはユダヤ人でして」と言ったところに既に表れていました。ローマでも、こういった反ユダヤの勅令を出したということがあります。

ユダヤ人はキリスト者に対する迫害を行いました。ローマに取り入って、カエサル以外を王にしていると言ってイエスを十字架につけ、また使徒たちを迫害する時の理由にしました。けれども、ローマにおいてユダヤ人は、社会的地位は認められていたものの、このように彼ら自身も迫害される傾向にありました。そして、後に、同じ唯一神を信じるキリスト者も、ローマから直接の迫害対象となります。皇帝ネロの時です。今も、キリスト者に対する激しい迫害が世界中にあります。同じように反ユダヤ主義による迫害も世界中にあります。

追放は残念な出来事ですが、主はこれをパウロの同労者として加えることに用いてくださったのです。パウロが来る前に彼らが既に信仰を持っていたので、彼らがどの時点で信仰を持っていたのか？五旬節の時、聖霊が降って、その時に世界中からエルサレムに集まって来たユダヤ人が、福音を聞き、悔い改め、三千人の男がバプテスマを受けました。アクラとプリスキラもそこから直接、

信仰へのきっかけが与えられたのかもしれませんが。

そして興味深いのは、二人は天幕づくりで、自分たちの家を既に持っていたようです。商売がうまくいっていたのでしょう。コリントの遺跡には、商店が立ち並んでいる遺跡も見つかっています。二階で住み、一階をお店にしていたのでしょうか。

そしてパウロが同業者でありました。ユダヤ教のラビは、給料をもらいません。自分で働きます。テサロニケ人への手紙第二で、「働かない者は、食べてはいけない」ということが書いてあります(2章)。それは、ユダヤ教の人たちにある考え方でもあり、パウロは教師でありながら、手に職も持っていました。天幕作りですが、革製品です。革ですと防水に適していますし。そして、商売相手はローマ軍であったりします。ローマ兵が、革製品の天幕やその他付随する革製品のものを購入します。ですから、結構、商売がうまく行っていたのだと思います。

ここから私たちは、一般の仕事をしながら、なおのこと主の働き人になることを見ます。今のキリスト教会は、完全に仕事をやめて、牧師は牧師給を受け取らないといけなくしている傾向がありますが、そんなことはありません。もちろん、今から出てきますが、支援があれば働きに専念できます。しかし、天幕づくりをしていること、一般の仕事をしていることが妨げにならないのです。

パウロは何度となく、コリント人への手紙で、自分は福音宣教の働き手であるけれども、その報いを受ける権利を敢えて使わなかったことを話しています。コリント人への手紙第一で多く話していますが、それは、一つは模範を示すため。それから、教会の支えから私腹を肥やす偽教師が巡回していたりしたからです。

⁴パウロは安息日ごとに会堂で論じ、ユダヤ人やギリシア人を説得しようとした。

いつものように、パウロは安息日ごとに論じていました。ユダヤ人だけでなく、ギリシア人もとありますが、すなわち改宗者も、また改宗はしていないが、神を敬う人々もいたということです。

2A 神を敬う人々 5-8

⁵シラスとテモテがマケドニアから下って来ると、パウロはみことばを語ることに専念し、イエスがキリストであることをユダヤ人たちに証した。

マケドニアから、シラスとテモテが戻ってきました。その時に、ピリピからの支援金も携えてきたのかもしれませんが。ピリピ人への手紙には、パウロが何度となく支援を彼らから受け取っていることを言及しています。「ピリ 4:15 ピリピの人たち。あなたがたも知っているとおりに、福音を伝え始めたころ、私がマケドニアを出たときに、物をやり取りして私の働きに関わってくれた教会はあなたが

ただけで、ほかにはありませんでした。」それで天幕作りは中断し、みことばを語ることに専念できました。働き人への支援が、いかに福音の働きを前進させることができるかが分かります。

アテネでは、神がだれであるかから語らなければいけませんでした。今は、すでに会堂に彼らはおり、それでイエスが、聖書に約束されているキリストであることを論証するだけで十分でした。

⁶ しかし、彼らが反抗して口汚くののしたので、パウロは衣のちりを振り払って言った。「あなたがたの血は、あなたがたの頭上に降りかかれ。私には責任がない。今から私は異邦人のところに行く。」

ピシディアのアンティオケで起こったことが、再現しました。ユダヤ人たちが口汚く罵ったので、パウロとバルナバが、足の塵を払い落とし、そこから出て行きました。そして、「13:46 見なさい、私たちはこれから異邦人たちの方に向かいます。」とっています。

パウロの念頭には、主がエゼキエルに、預言者が語らなければいけない義務について語られた言葉があったことでしょう。「エゼ 3:17-19 人の子よ。わたしはあなたをイスラエルの家の見張りとした。あなたは、わたしの口からことばを聞き、わたしに代わって彼らに警告を与えよ。わたしが、悪い者に『あなたは必ず死ぬ』と言うとき、もしあなたが彼に警告を与えず、悪い者に悪の道から離れて生きるように警告しないなら、その悪い者は自分の不義のゆえに死ぬ。そして、わたしは彼の血の責任をあなたに問う。もしあなたが悪い者に警告を与えても、彼がその悪と悪の道から立ち返ることがないなら、彼は自分の不義のゆえに死ななければならない。しかし、あなたは自分のいのちを救うことになる。」語ることに責任があります。もし語らなければ、自分に災いがあります。けれども、その結果は主が責任を取られるということです。それが、衣のちりを振り払う行為であり、また足のちりを払い落とす行為だったのです。

⁷ そして、そこを去って、ティティオ・ユストという名の、神を敬う人の家に行った。その家は会堂の隣にあった。

異邦人のところに行くと言ったので、彼は、この神を敬う異邦人の家に行きました。会堂のすぐ隣にありました。そこで、集会を開いて行きました。大きな家であったに違いありません。

⁸ 会堂司クリスポは、家族全員とともに主を信じた。また、多くのコリント人も聞いて信じ、バプテスマを受けた。

会堂の隣にあったので、会堂の祈りと秩序を維持する会堂司にも福音が伝わりました。彼らが家族全員と共に主を信じたのです。ピリピのリディアや看守、もっと前には百人隊長コルネリウス

も一家全員が信じました。そういった働きを神がしてくださることがある、ということです。

そして、他のコリントの住民も来て、バプテスマを受けています。この時のことを話しているのでしょう、パウロはコリント第一 1 章で、クリスポにバプテスマを受けたことを話しています。「1:14 私は神に感謝しています。私はクリスポとガイオのほか、あなたがたのだれにもバプテスマを受けませんでした。」

3A 「語り続けろ」との励まし 9-11

そして、こういった出来事があった後で、夜に主が幻の中に現れてくださいます。

⁹ある夜、主は幻によってパウロに言われた。「恐れなくて、語り続けなさい。黙ってはいけない。¹⁰わたしがあなたとともにいるので、あなたを襲って危害を加える者はいない。この町には、わたしの民がたくさんいるのだから。」

夜に主が現れ下さる時、それは、落ち込んでいる時、行き詰まっている時なのですが、その時にこれからの指針が主から示される時でもあります。口汚く罵られて、これまで恐れていたのがますますそうなったのでしょうか。自分がしていることは、神のみこころにかなっていることなのか？そう疑ったかもしれません。しかし、主は励まされる方です。私もしばしば、こういった励ましを受けます。福音の働きがうまく行かない時にこそ、主がはっきりと示して下さり、確かにこれはみこころなのだ確認し、前進できるのです。

多くのクリスチャンが人間的に、うまく行っていないクリスチャンに対して、これが原因なのだよというのですが、それが聖霊の働きに逆行していることを知らないといけません。むしろ、「今、していることを、し続けなさい」と聖霊は、励まされるのです。忠実さが求められているからです。

パウロが気にしていたのは、物理的な危害でした。これは彼にとっては現実で、再び逃げる態勢でないといけないのか？と思ったことでしょう。会堂の隣の家で起こっていることですから、ユダヤ人がいつぞや襲ってくるか分かりません。しかし、「わたしは、共にいる。危害を加える者はいない。」と主が保証してくださったのです。

そして、わたしの民が多くいると言われました。パウロの目には、福音を信じて、それで神の民となるのですが、しかし、神の目には、すでに彼らを選んでおられます。ですから、私たちが福音を宣べ伝えるのは、私たちの努力で信じさせるのではなく、神がすでに選ばれ、私たちが語る時に、彼らを召されると考えるのがよいのです。もちろん、すべての人が信じることを神ご自身が願っておられますが、選ばれている者たちのみが招きに応答します。

ですから、これは大きな動機付けになります。語りつづけなければいけないということです。困難があっても、忠実でいることです。

¹¹そこで、パウロは一年六か月の間腰を据えて、彼らの間で神のことばを教え続けた。

これまで、マケドニアでの宣教は、いつ離れてもおかしくない状況で、事実、すぐに離れていきました。危害を加える人々がおり、物理的に続けるのが不可能だったからです。しかし、コリントにおいては、主ご自身が守ってくださるのです。そして、まだ信じていないけれども、信じる人々が大勢いると主が教えてくださいます。ですから、腰を据えました。いつでも、出ていけるようにするのはなく、むしろ、居座るのです。

そして彼がしたことは、「教え続けた」です。教えることによって、教会が実質的、霊的な成長をします。「エペ 4:11-13 こうして、キリストご自身が、ある人たちを使徒、ある人たちを預言者、ある人たちを伝道者、ある人たちを牧師また教師としてお立てになりました。¹²それは、聖徒たちを整えて奉仕の働きをさせ、キリストのからだを建て上げるためです。¹³私たちはみな、神の御子に対する信仰と知識において一つとなり、一人の成熟した大人となって、キリストの満ち満ちた身丈にまで達するのです。」そして、悪いものから救います。「I テモ4:16 自分自身にも、教えることにも、よく気をつけなさい。働きをあくまでも続けなさい。そうすれば、自分自身と、あなたの教えを聞く人たちとを、救うことになるのです。」

4A 裁判からの救い 12-17

¹²ところが、ガリオがアカイアの地方総督であったとき、ユダヤ人たちは一斉にパウロに反抗して立ち上がり、彼を法廷に引いて行って、¹³「この人は、律法に反するやり方で神を拝むよう、人々をそそのかしています」と言った。

危害が加えられるような事件が起こりました。パウロに反抗してユダヤ人たちが立ち上がり、法廷に引いて行ったのです。「ガリオ」は、ローマの有名な哲学者「セネカ」の兄でした。彼がアカイアの地方総督で、ここで裁判席に着いていました。コリントがアカイアの首都ですから、ここでの「法廷」は、ビーマ、あるいはベマと言われて、市場（アゴラ）の中央にある一段と高くなっている所です。この遺跡がコリントにばっちり残っています。コリントのアゴラは、ローマでも有数の広さがあったそうですが、そこに大きく立っています。

¹⁴パウロが口を開こうとすると、ガリオはユダヤ人に向かって言った。「ユダヤ人の諸君。不正な行為や悪質な犯罪のことであれば、私は当然あなたがたの訴えを取り上げるが、¹⁵ことばや名称やあなたがたの律法に関する問題であれば、自分たちで解決するがよい。私はそのようなことの裁判官になりたくはない。」¹⁶そうして彼らを法廷から追い出した。

ガリオの判断は、妥当なものです。ユダヤ人の律法についてのことですから、あなたがたで勝手に解決すればよいということです。これが、その時のローマの行政官の基本的な姿勢でした。ユダヤ人の間のことだから関与しない、というものです。総督ピラトの時からそうでしたね、ローマ法によって裁きようがないのです。けれども、後にキリスト者が増えて行って、ローマが脅威に感じて、迫害を始めて行きます。

けれどもこうやって、主は確かに、パウロを危害から守っていただきました。

¹⁷ そこで皆は会堂司ソステネを捕らえ、法廷の前で打ちたたいた。ガリオは、そのようなことは少しも気にしなかった。

ソステネは、クリスポが主を信じたので、彼の次に会堂司になっていたのでしょうか。この彼が求道していたのでしょうか、自分たちで解決せよとガリオが言うので、自分たちで勝手に打ちたたいたのです。ガリオは、自分の管轄外のことですから、気にもしませんでした。

何と可哀そうなことかと思いますが、しかし、このソステネ、何とコリント第一 1 章 1 節に出きます！「神のみこころによりキリスト・イエスの使徒として召されたパウロと、兄弟ソステネから、」コリント人への手紙はエペソにいる時にパウロが書いていますから、ソステネは信じて、パウロと一緒に旅をしたか、あるいは、エペソに行って合流したのでしょうか。こんな困難なことがあっても、それでも主を信じ、従ったのです。

次は、エペソの宣教の前段階のような出来事を見ます。コリントで用いられた器が、エペソでも用いられる姿を見ていきます。